被災地派遣レポート＜第３７回＞

下水道局総務部総務課　　大道　竜嗣さん

■出発前の不安

平成２３年３月１１日に東日本大震災が発生した後、私は被災地の目を疑う光景をテレビや新聞を通して見るたびに心が痛み、被災地のために自分には何ができるのだろうと考えていました。

そんな中、東京都職員として被災地支援に赴く話をいただき、岩手派遣第４陣として陸前高田市に派遣されることになりました。未曾有の大震災が起こった現地に実際に足を運んで支援をできる機会を与えていただいたことは、自らの人生においても非常に意義のあることだと感じていました。

その一方、初めて被災地支援活動に参加する私は、出発前まで被災者の方との接し方に不安も抱えていました。被災地の方々と触れ合う時には、漠然と被災者の方の感情に気をつけようということは考えていましたが、本当に「心が寄り添う」ということはどういうことなのかわからないままの出発になりました。

■岩手県陸前高田市へ

私が岩手派遣第４陣として派遣されたのは、震災から１か月が経過した平成２３年４月１７日から２２日までの６日間でした。この時期は寒さも落ち着き、春の訪れを感じられる季節になっていました。

しかし、初めて自分の目で被災した現場を見たとき、その天候の良さが、同じ自然の力によって破壊された街の景色と重なると、より悲しさを膨らませているように感じました。

水道、下水道などのライフラインの復旧は道半ばであり、食糧も不足し、仮設住宅も建設が進められている途中で、未だ多くの被災者の方が避難所生活を強いられている時期でした。

深夜、都庁舎を出発したバスは、翌朝宿舎である大船渡市の県合同庁舎に到着し、私たちは第３陣全員の拍手の中迎えられました。最初は自分たちとの雰囲気の違いに戸惑いましたが、今となっては第３陣の仲間としての結束が生まれていたことを表していたのだと思いますし、その後自分たちも第５陣を迎える頃には一体感が生まれ自然と拍手で迎えていたことを思い出します。

宿泊場所となった庁舎の会議室は、食糧、ゴミ箱などの共同スペース、各班の机、その周りの寝床となる寝袋などが、しっかりと整理され配置されていました。支援隊のマニュアルもない中で、短い期間で共同生活のルールを整えた先陣の努力が目に見えてわかりました。

共同生活から学んだことは、本当に被災地のためになる支援を行うためには、やる気だけではなく「心構え」が必要だということです。言い換えれば、支援する側の秩序や自立性が重要だということです。チームの和が乱れ、逆に被災地の方に迷惑を掛けるようなことは絶対あってはなりません。どんなに慣れない生活でも、先の見えない不安を抱えた被災地の方々の姿を思い浮かべ、仲間を尊重し、チームとして最大限の力を被災地のために発揮するんだという心構えがあってこそ、本当の支援活動ができるのだと感じました。

■初めて出会った被災者の姿

作業初日は支援本部となる陸前高田市の給食センターで救援物資の搬出・搬入作業に従事しました。全国から届けられる支援物資（食糧、衣料、生活雑貨など）をセンター内に運びいれ種類ごとに分類し、それを避難所に届けるために自衛隊の車に積み込む作業です。

事前に報道等で、マンパワーの不足により仕分け作業が進まず、支援物資がなかなか被災者に届かないという話を聞いていましたので、この活動は、これまで募金をすることしかできなかった自分が、初めて自分の体を動かし、被災者へ物資を届けるという支援ができていることを実感できる作業でした。

センターの作業では陸前高田市の市職員の方や自衛隊員の方とともに、地元ボランティアとして被災者の方が一緒に作業を行っていました。

初めて実際に出会った被災者の姿は、落ち込んでいるという私の被災者像とは違い、一様に明るく活発な様子で作業に打ち込む姿でした。辛さを見せず、と言うよりは悲しみを紛らわせているかのように作業に没頭している姿に引っ張られ、私たちも作業に没頭しました。被災者の方が、同じ被災者の方のために懸命に頑張っている姿は、人間の心の強さや、助け合うことの素晴らしさを体現されているように感じ、私はその助け合いの一員として少しでも力になりたいという気持ちにさせられました。

被災者の方と一緒に行った作業を通じて、出発前に抱いていた接し方への不安は少し解消され、気持ちがつながれば人と人が力を合わせることは自然なことであり、そして本当に大切なことなのだと感じました。

■通学路のがれき撤去作業

今回の被災地支援活動の中で最も印象的だった作業は、作業３日目に小友小学校で行った通学路のがれき撤去作業です。

小友地区は半島に位置し、左右両方の湾から押し寄せた津波により甚大な被害を受けた地域です。震災から１か月が経ったこの時も、まだあたり一面ががれきで埋め尽くされており、その光景を見たときには本当に言葉を失いました。

ついこの前までここに普通の暮らしがあったこと、そしてそれが今は跡形もなく消えてしまったこと、また東京での自分の生活との違い戸惑いながら、喪失感や無力感を感じずにはいられませんでした。そして、それはこのあとの作業に不安を感じさせました。作業の内容もさることながら、この惨劇を受けた方々に、自分はどのように接したらいいのかがわからなくなったからです。

少し高台にある小友小学校も震災時は１階が津波に襲われ、また、小学校より低い位置に隣接していた小友中学校は校舎が全壊していました。

私たちが訪れた日は、ようやく小学校が始業式を迎えた当日で、翌日は小学校の入学式、翌々日は小学校の校舎を借りて授業を再開する小友中学校の始業式が控えている時期でした。学校の再開が遅れていることも報道で聞いていたので、再開の日を迎えられたという話を聞いたときは、この日を迎えるまでの子どもたち、ご家族の気持ちを思いながら、喜ばしく感じました。

作業現場となった子どもたちの通学路は、車道は優先的にがれきが撤去されているものの、歩道部分はまだがれきや土砂が堆積し、中には太い流木、自動車の部品、住居のアルミサッシがはがれたものなどもあるため、非常に危険な状況でした。

私たち（二班１０名）は、緊急時の避難場所の確認を行った後、防塵マスクなどに身を包み、全長２００ｍほどの作業にかかりました。土砂はシャベルで通学路の脇（元は田んぼが広がっていたところ）にかき寄せ、手で拾えるがれきを退かし、大きながれきは何人かで持ち上げて避ける作業などを繰り返し、約３時間をかけて通学路を確保することができました。周囲の風景は変わり果ててしまいましたが、小友の子供たちが明日からこの通学路で怪我をせず学校に行けることを願いました。

その一方で、作業の途中、がれきの中から津波で流された写真や、夫婦の名前の入った湯呑茶碗など、被災された方の思い出の品が発見され、私は心が締め付けられる思いでした。日常が失われた痕跡を見つめながら、思い出を飲み込んでいった自然の力の恐ろしさを感じ、この方々の無事を祈りながら、いつかお手元に戻ればと思い、班員みんなで集め学校の方に預けました。

■前を向いて進んでいくということ

小学校ではがれき撤去作業以外に、駐車場の陥没補修や体育館、理科室、実験道具の清掃などを行いました。また、ガラスが割れないように貼ってあったガムテープをはがす作業も行い、それは余震の落ち着きと、新学期への第一歩を歩き始めたことを示しているように感じました。

小学校には自分たち以外にも大学生くらいの一般ボランティアのグループも来ていて、構内の清掃作業などを一緒に行いました。私たちは派遣という仕事の一環で来ていますが、彼らは自分たちの意志で来ているわけで、私は同じ日本人として彼らを誇らしく思いました。また、年齢や出身地が違う人たちとも、「東北を救いたい」という気持ちがあれば自然と協力し合えるのだと感じました。現代の日本人はコミュニケーションが希薄だと言われることがありますが、被災地でみんなが助け合い、協力し合っている姿を見ているときは決してそんなことはない、と思わされました。

子どもたちと直接話す機会はありませんでしたが、廊下ですれ違うときには大きな声で「こんにちは」と元気に挨拶をしてくれます。こちらもその元気に引っ張られるように挨拶をしましたが、非常に明るい様子に少し安心しつつも戸惑いを感じました。

すべての作業が終了し、中学校の副校長に挨拶に行ったところ、子供たちについてこんな話を聞きました。

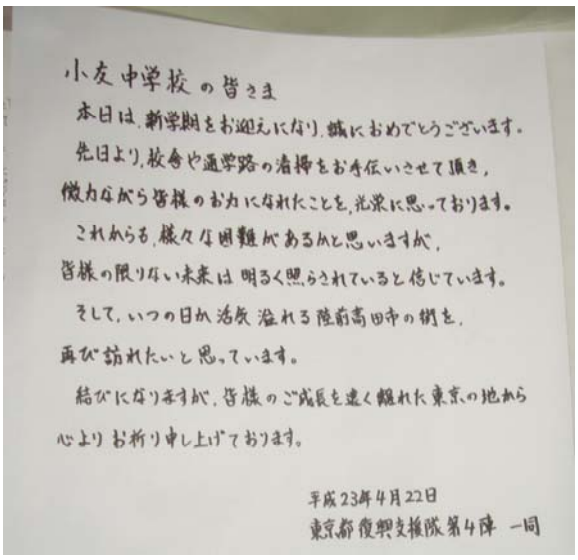
「津波が襲ってきたとき、校舎にいた生徒は非難して無事でしたが、学校を休んでいた子の中には亡くなった子もいます。そして、元気そうな子どもたちも、家族やクラスメイトを亡くした子もいます。悲しみが癒えることはありませんが、それでも前を向かなければいけないことを感じているからこそ、明るく振る舞っているのだと思っています。」

副校長の言葉は、自らの気持ちも含めて、被災者の今の気持ちを代弁しているようで、私はただ聞くだけで、返す言葉が見つけられませんでした。作業が終わると戻る場所がある自分たちと、その悲しみに中でこれからもこの地でずっと生きていく被災地の方との違いを感じた瞬間でした。

そして挨拶を終えてその場を去ろうとしたとき、副校長から「東京都の皆さんから、明日の中学校の始業式で読み上げるメッセージを頂けませんか」という、思いもかけなかったお願いをされました。

私は作業を通じて被災地の復旧を少しでも進めるために派遣されましたが、作業ではない部分で被災地とつながれたことを嬉しく感じました。それと同時に、副校長の先ほどの言葉が脳裏をよぎり、そんな複雑な気持ちを抱えている子どもたちにあててどんなメッセージを送れるのかと悩みました。

恐縮しつつも依頼を受け、メッセージと寄せ書きを翌朝届けることにしました。宿舎に戻った後に第４陣の仲間にこの話を伝え、全員が快く寄せ書きを書いてくれました。その言葉には今回の作業だけでは見えなかった一人ひとりの想いが表れていました。


小友中学校の皆さま

本日は、新学期をお迎えになり、誠におめでとうございます。
先日より、校舎や通学路の清掃をお手伝いさせて頂き、
微力ながら皆様のお力になれたことを、光栄に思っております。
これからも、様々な困難があるかと思いますが、
皆様の限りない未来は、明るく照らされていると信じています。
そして、いつの日か、活気溢れる陸前高田市の街を、
再び訪れたいと思っています。
結びになりますが、皆様のご成長を遠く離れた東京の地から
心より お祈り申し上げております。

平成23年4月22日
東京都復興支援隊第4陣 一同

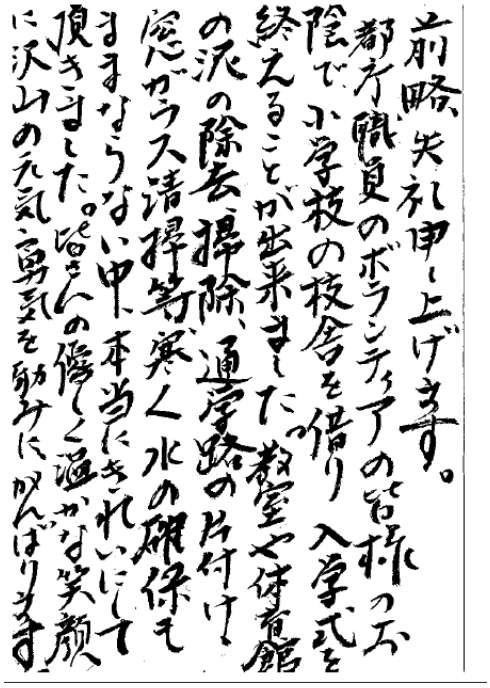
始業式で読み上げるメッセージは、被災地の子どもたちへの特別な言葉であることを心に浮かべながら、一つ一つ言葉を選んで完成させました。

翌朝副校長にメッセージと寄せ書きをお渡しましたが、始業式は私たちが東京に戻る日だったのでどのように読まれたかはわかりません。ただ、少しでも自分たちの気持ちが届いていればいいなと思いながら、東京への帰路に着きました。

■東京に戻って

東京に帰ってきて、都庁舎をでて新宿駅まで向かう途中、私は普段なら何も思わないネオンが輝く街並みを歩きながら、被災地とのギャップに気持ちがついていかず、カルチャーショックのような状態になりました。どれだけ心配していても、やはり被災地とこちらの生活は違うのだと感じずにはいられませんでした。

私自身も日常の生活に戻りましたが、被災地の中でも陸前高田市のニュースは常に気にかかるようになり、自分の五感で体感し、触れ合いがあった街は派遣以前よりも近い存在に感じていました。


前略、失礼申し上げます。
都庁職員のボランティアの皆様の
陰で小学校の校舎を借り入学式を
終えることが出来ました。教室や体育館
の泥の除去、掃除、通学路の片付け
怪ガラス清掃等寒人水の厳保も
ままならない中、本当にきれいにして
頂きました。皆さんの優しく温かな笑顔
に沢山の元気と勇気を貰ひ
に沢山の元気と勇気を貰ひ
がんばります。

そんなとき、総務局の被災地支援掲示板のページに「被災者からの声」という見出しがあり、何気なくそれを開いて見てみました。するとそこには小友中学校の校長先生から直筆のはがきが届いていました。校長先生の言葉には、自分たちへのお礼の気持ちや、中学校が無事始業式を迎え学校生活がスタートできたことが綴られていました。

私は驚きとともに、学校の再開に尽力されている中、感謝の気持ちをわざわざ送っていただいたこと、そのことで無事学校生活がスタートできたことを東京にいながら知ることができたことに感動し、人と人との絆を感じさせていただきました。

■今回の支援活動を通して

支援派遣を通して最も感じたことは、人と人がつながることの大切さです。

出発前にはわかっていなかった「本当に心が寄り添うとはどういうことなのか」という問いの答えはわかりませんが、自分の中で一つ考え出した答えは、復興は被災地の人だけが頑張ることではなく、何人もの被災者と支援者、みんながつながってこそ本当に復興に向かっていけるのではないかということです。

そして、今回の支援活動では、一緒に協力し合いながら活動を行った４人の班員とのつながりも非常に大きかったですし、同じ陣の仲間たち、派遣にあたり送り出してくれた職場の皆さんや後方支援を続けてくれた職員の方がいてこそできた活動だったと思います。また、余震が続く不安の中、応援し支えてくれた家族との絆をさらに強くすることにもなりました。

自分自身も、歴史的な震災を自分の目で見て感じ取ったことや、被災地の方とつながれた体験から、生きていくうえで「助け合い」や「心のつながり」をこれまで以上に大事にしていきたいと考えさせられました。すべての経験が一生忘れないものになりました。

このような貴重な経験をさせていただいたことに感謝するとともに、被災地の復興が少しでも早く進み、被災された方々の心が少しでも穏やかになる日が来ることを祈りたいと思います。そして、この時代に生きる日本人として、これからも被災地と様々な形でつながっていきたいと思います。